

ホテル分野が好調、ZEROシリーズを新たな主力製品へ 前芝辰二 代表取締役社長

外国人観光客の来日により宿泊施設が不足していることから、弊社のテリトリーでもあるホテルは大小の施設が全国で建設されている。一方でファッションの大手チェーン、飲食といった店舗向けは、消費が落ち込んでおり、盛り上がりにかけるのが現状。住宅については当初新築着工件数が年間70万戸程度と想定していたが、90万戸台で毎年建設が行われている。ただこちらも新築着工に落ちつきが見え始め、これ以上の大きな伸びはあまり見込めないだろう。また、中小のオフィスビルなどで照明のLED化が行われているのが1～2割程度と工業会などでも指摘されている。この分野は手法によっては魅力的な市場だが、大光電機においてはあまり得意分野ではない。

2016年度の売上高はほぼ400億円。創業以来の最高の売上高を達成した。ただ経常利益は2015年度が34億円だったが、2016年度は30億円には届かない水準にとどまる。販促費用のほか、人員が増えたことなど、減益の要因ははっきりしている。2017年度については420億円の売上高と28億円の経常利益を目指している。

標準で重耐塩、3Dプリンターも導入

弊社ではこれまでLEDダウンライトでシェアを確保し、業界に先駆けて値下げも行ってきた。また住宅向けの間接照明も知名度を高め、弊社の事業全体のうち40億円程度の規模を占めている。今後は、マンションの屋外共有部など向けのアウトドア製品となるZEROシリーズ

も長期的に育てていく。外回りの製品で一定のラインアップをそろえシリーズ化している企業の事例はあまりなく、大光電機もそうした分野へ2017年度から本格的に挑戦していく。海辺のエリアでも使用可能な重耐塩塗装を施している。こう

した塗装は一般的には標準仕様ではなく別オーダーとなる。標準仕様とするには、塗装工場、器具工場の協力、特殊なパッキンなど色々な条件が整わないと実現が難しい。ゼロシリーズではステンカラーが基本だが、ブラックやブラウンなどの別色でも標準タイプと同じ価格で提供させて頂く。初年度は3億程度の売り上げを目指し、今後3年程度をかけて年間15億円くらいの事業には育てていきたい。われわれの主力製品の1つであるダウンライトと同じようなインパクトのある商品になると期待している。また、照明の前面に取り付けると光の色味や拡がり方に変化を付けられるフィルターなどもアピールしていく。こうしたフィルターの作成には3Dプリンターを活用した。

